

---

# かたつむり観光客のプレイ日記

大豆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かたつむり観光客のプレイ日記

### 【Nコード】

N7790X

### 【作者名】

大豆

### 【あらすじ】

私はこの世界で試練を課されたい。クリアしないと帰れない。それはいい。しかしなぜ私の体はかたつむりになっているのだろう。  
ローグライク系フリーゲームのEionavアリアントのomakeをかたつむり観光客でプレイしてみた際の出来事を物語風に味付けしたものです。縛りプレイはかたつむり観光客のほかに、埋まらないロードしないペットは一匹まで。

## 日記1

何がしか私のあずかり知らぬ事情において、私はこのEionnaという世界で試練を課されるらしい。

Eionnaはローグライク系のRPGである。

試練は全部で三つ。

- ・レシマスというダンジョンの踏破
- ・各地で困っている人の救済（サブクエスト全クリ）
- ・3つの混沌の城を支配者から解放

これらをクリアすればこの世界から解放されるらしいが、混沌の城というのは人であるこの身には無理ではないだろうか。

またこれらの試練をさらに厳しいものにしてるのが私の体である。この身は人であると先に言ったが、実は人ではない。

人間であったはずの体はなぜ身長9cm、体重1kg未満のカタツムリになっていたのだ。

これでは剣を持つこともできない。どうやって戦えと。

さらにこの体、塩にとてつもなく弱いらしい。なんでも塩に触れると即死であるとか。

……流石にこれは無理ではないか？

だが、何事もやってみるまでは分からない。とりあえず頑張ってみよう。

現状確認も終えたことだし、早速始めよう。  
ほら、誰かが私に呼びかけているのが聞こえる

## 日記1(後書き)

以下のキャラクター情報はゲーム中にF11で出る物です。鑑定した武器を装備していると出ませんが…。  
とりあえず見なくても問題ありませんが、見るとかたつむりの弱さが少しわかります。

キャラクター情報 517年8月12日 1時23分 わが家

飛躍の妖怪 バード

男 17歳 9cm 0kg

種族 : かたつむり 信仰 : 無のエイズ

職業 : 観光客 所属 : なし

レベル : 1 経過日数 : 0

残りBP : 5 経過ターン : 10

金貨 : 464 殺害数 : 0

プラチナ : 0 最深到達 : 1階相当

プレイ時間 : 0時間1分38秒

筋力	:	3	(3)	bad	生命力	:	100	(100)
耐久	:	3	(3)	good	マナ	:	80	(80)
器用	:	3	(3)	bad	狂気度	:	0	
感覚	:	5	(5)	good	速度	:	25	
習得	:	3	(3)	bad	名声度	:	0	
意思	:	2	(2)	bad	カルマ	:	0	
魔力	:	1	(1)	hopeless	DV	:	0	



魅力	魔力	意思
:	:	:
1	1	8
1	1	(8)
(1	(1	
1)	1)	
		s
		u
		p
		e
		r
		b
		b
P	D	カ
V	V	ル
		マ
:	:	:
0	0	0

## 日記2

私に呼び掛けていたのは緑色の髪をしたエルフ耳の男だった。

この世界にはエルフはおらず、エレアと言う魔法の得意な種族がいると目の前の緑髪は語った。

誰かが住んでいた形跡のある洞窟には緑髪を含め2人のエレアが居た。

さつきからニヤニヤとこちらを見下している緑髪がロミアス。

傍でこっちの安否を気遣ってくれているのがラーネイレと言っらしい。

どちらも標準的な体格なのだろうが、この身が小さすぎて二人とも巨人に見える。

やれやれ、これでは色々なことがままならない。

この世界ですべきなのは、まず体を大きくする方法を探すことだよだ。

「申し訳ないが二人とも、体を大きくする方法をご存じではないか？　大きな試練を課せられているというのにこんななりでは、できる物もできないからね」

「カタツムリ風情がいったいどんな試練を課せられというんだい？」

「ちよつとロミアス、そんな言い方はしないで。ごめんなさいね。彼は他の人を下に見るのが欠点なの」

そう言いつつ、ラーネイレが教えてくれた方法は、牛乳を飲むということだった。

私知知っている牛乳とはどうやら効能が違うようで、祝福されている物を飲めば確実に背が伸びるらしい。



ゲームだからと無理やり納得することにした。なにはともあれ、問題が解決するなら良いことだからだ。

常識的なことをあまり知らない私を慮ったのか、エレアたちがこの地のことを教えてくれると言いだした。彼らにも急ぐ用事があるよ。うなので申し訳ないが、好意はありがたく受け取ることにする。

「では基本的なことだが……」

ラーネイレは準備があるとかで、教えてくれるのは緑髪のロミアスだ。

口は悪いが案がいい奴なのかもしれない。

ロミアスは色々と教えてくれた。

たとえば魔法が込められた巻物を読めば魔法が発動できること。

もちろんその魔法事態を覚えることも可能だが、私の身はとても魔法を覚えられそうにないらしい。

端的に言えば基本的なことを除いてあらゆることにおける才能<スキル>が感じ取れないとか。

基本的なこととは、走ったり物を投げたりなど、出来ない方がおかしいことだ。また、これは基本的かどうか分らないがカタツムリなのになぜか手があり、弓が装備できる。剣は重そうなので持とうとすら思えないが。

カタツムリある私に才能がある方がおかしいとは思いつつも魔法を使えないのかと落胆する私に、街に居るギルドトレーナーにプラチナコインというアイテムを渡せば<スキル>を付与してくれるとロミアスは教えてくれた。

とはいえそのコインも簡単に集められるわけではないようなので、しばらくは巻物や杖などの魔法具に頼ることになりそうだ。(ロミアスいわく魔法具を使う才能もないが使えないことはないとのこと)

「後はこれだ」

アイテムを分けてくれたロミアスは最後に、地面に落ちている肉片を食べてみると言いだした。洞窟の床は決して清潔は言えない。思わず疑問が私の口を突いて出た。

「地面に落ちている物だが？」

「深いネフィアに行けば何日も中で過ごすことになる。食べる物が無くなることもあるだろう。その時、このように卑しい真似ができるかどうかで生き残る可能性が変わってくる。わかるだろう？」

ネフィアとはダンジョンのような物らしい。己を鍛えるために、またお金を稼ぐためには避けて通れない場所だとか。私は納得し、体を這いずらせて肉片を口にする。

その時緑髪は言った。

「本当に食べてしまったのか？」

何を…？ とたずねる暇もなく、私の体は悲鳴を上げた。

これは…クカ…腐っている！ この野郎！ なんてものを食わせる  
……！

私の体が麻痺し、思考が混濁する。だがそれだけではない。私は気づいてはいけないことに気がついてしまった。  
私が食べた肉片の下、そこには服の残骸があったのだ。  
そして私の本能的が、食べた物の正体を教えてくる。

これは  
これは人肉だ…ッ！

おのれロミアスツツッ！ この野郎…ッ！ くぁwせdrftgy  
ふじこ1p…！

あまりの衝撃に狂った私の脳裏でシステム音が聞こえてくる。

【あなたの気が狂いました】

【あなたは「不安定」になり「混乱」し「混濁」し「朦朧」とし「恐怖」しています】

【人肉を食べたことによるマイナスボーナスが発生します】

【筋力 - 1】 【耐久 - 1】 【魅力 - 1】 【器用 - 1】 【感覚 - 1】

【習得 - 1】 【意思 - 1】

その後「ウージツムシ ウージツムシ」「うにゅみゅあ！」「このかたつむり野郎が！」などと言いつつぐるぐるとまわったりするなど、私は意味不明の言動を繰り返したらしい。

ロミアスに大きな迷惑をかけたようだったが、正気に戻った私は謝ろうとは思えなかった。知ったことか。

そんな私を見てロミアスがニヤリと笑う。

私の中では悪意が坩堝を描いていた。

この緑野郎…！ 今の實力では決して敵わないが、今に見ている…！ すりつぶしてペースト状にしてやる…！

私はこの時ハッキリと殺意を覚えた。殺しと言う物を経験したことなかった私だが、今なら余裕で人を殺せると思ったのだった。

この身になって初めて感じた強い感情が殺意だとは情けないとも思うが、生きる指標ができたのは良いことである。

何より石に齧りついてでも生きてやろうと思えたのだから。ちなみに歯はないので比喻だ。

さて、大体の基本的なことは教えてもらったし二人も先を急ぐというのでここで別れることにした。

この洞窟は二人の持ちモノではないようで、以後私が好きなようにして良いとのこと。

計らずしも生きる拠点を手に入れることができてしまった。なんと

いう幸運だろう。案外試練も簡単に終わるかもしれない。

かたつむりで居続けるつもりは毛頭ないので試練はできるだけ早く終わらせようと思う。そして隙あらばロミアスの口にエレアの死体を押しこんでやる。

決意を胸に秘めた私は休憩して狂態で消耗したスタミナを回復した後、二人のエレアに続いて洞窟を後にするのだった。

## 日記2 (後書き)

勧められるままに乞食の肉を食べてみたら全能力値が下がりました。  
緑め！

キャラクター情報 517年8月12日 7時13分 わが家

飛躍の妖怪バード 男 17

歳 9cm 0kg

種族 : 無のエイス : かたつむり 信仰

職業 : なし : 観光客 所属

レベル : 1 : 経過

日数 : 0

残りBP : 5 : 経

過ターン : 253

金貨 : 464 : 殺

害数 : 0

プラチナ : 0 : 最深到

達 : 1階相当

プレイ時間 : 1時間18分53秒

筋力 : 2(2) bad

生命力 : 100(100)

耐久 : 2(2) good

マナ : 80(80)

器用 : 2(2) bad  
 感覚 : 4(4) good  
 習得 : 2(2) bad  
 意思 : 1(1) bad  
 魔力 : 1(1) hopeless  
 魅力 : 3(3) bad  
 DV : 0  
 PV : 0  
 狂気度 : 7  
 速度 : 29  
 名声度 : 0  
 カルマ : 0  
 軽装備(合計重量 5.7s)

装備品  
 背中 : なし  
 遠隔 : 長弓 (良質) 「硝子製」 2.1s  
 矢弾 : 矢束 (良質) 「鉛製」 3.6s

特徴  
 「フィート」あなたの持久力は恐ろしい「スタミナ上昇」

仲間  
 称号  
 乞食の家 Rank. 91  
 給料 : 約 270 gold ノルマ : なし

### 日記3

洞窟のすぐ南に、炭鉱で栄える街ヴェルニースがある。私が今目指している場所だ。

その全容はカタツムリであるこの身では計り知ることができないが、とても大きいことが分かる。

ヴェルニースを見つつ、カタツムリにしては意外と速いのは思う速度で草原を進む。平坦な道が続くので移動も楽だ。

短い草に覆われた大地のところどころに木が生えている。

アピの実、というパサパサした実になる草も生えていたので一つ失敬してみたのだが、これがなかなか悪くない味だった。

飯を食うことすら困ると思えないが、いざという時には頼りにさせてもらうとしよう。

アピの実のほかには薬草や山菜、何かの鉱石のかけら、さらに朽ちかけた骨や折れた剣、なぜか腐った魚の死骸なんていうのも落ちて

いる。  
私知っていた世界とは違い、とても物騒なところだ。いよいよ気を引き締めねばなるまい。

そう言えばこの世界には個人個人が持つ<職業>と言う物がある。飯を食うためにいやいや就くアレとは違い、その<職業>とは生まれてからの才能のような物で、<職業>に関連のあるスキルを生まれた時から持っているのだ。

私とことん非才なのはこの身の<職業>が<観光客>であること



も大いに関係していると思われる。

<観光客>はローグライク系では言うまでもなく最弱の<職業>で、戦闘に役立つ<スキル>は一つも得られないそうだ。

「おい、カタツムリがこんなところで何してる」

その<観光客>とは違い、目の前の人物が持つ職業はきつと盗むことに特化した物に違いない。

盗賊オーラがむんむんと感じられるのだ。

「碌なもん持ってなさそうだな。なんでこんなのに声かけちまったんだ」

と言いつつ盗賊はこちらに近づいてきた。盗る物は盗るらしい。

赤い布で頭を覆った盗賊風の男はこちらに何をする暇を与えず、私を踏みつけながら私のアイテム入れに腕を突っ込んでいくばくかのお金を奪っていった。

あんまりに貧乏でみすばらしい私が可哀そうになったのか、取って行ったお金はほんの一割ほどだ。

それに感謝すればいいのか起こればいいのか判然としなかったが、とりあえず踏みつけられた被害は甚大だ。

死ぬかと思った。

数値としてみると体力が半分ほど削られてしまったが、こんな体でこの先やっていけるのか大いに不安である。しかし、不安だからと動かないのではこの世界を脱出することはできないだろう。

その前にステータスを見て…うん？ BPとはなんだ？ ボーナスポイント？ レベルアップごとに手に入ると。そうか。

これで今持っているスキルを強化できるようだ。

今持っているスキルは「治癒」「重装備」「中装備」「軽装備」「回避」「隠密」「釣り」「信仰」「旅歩き」「瞑想」「格闘」「弓」「クロスボウ」「投擲」である。

この中なら「隠密」か「回避」の二択である。攻撃に使うスキルなんて知らん。

どちらも最優先で上げたいが、ここは「回避」にしておくでしょう。

【あなたは器用になった！】【あなたの「回避」の技術は向上した！】

操作するのは頭の中ですので違和感が凄いが、慣れるとこの感覚も消えることだろう。

とりあえずボーナスポイントを全てつぎ込むと二つメッセージが聞こえてきた。

それほど変わったとも思えないが、大事なことはコツコツ行くことである。

数値にして見えるので、成長度合いも分かりやすい。やる気を継続するのに一役買ってくれるだろう。

さて、街である。

ヴェルニースに着くころにはすでに一夜明けて昼も過ぎていた。さすがカタツムリ。目と鼻の先に思えた場所も一日半かった。

街に付くと、夜だというのに広場で誰かが演説している。

青白い顔をした黒づくめの男が、壇上で何かをわめいているようだ。服は高級そうなので偉い人に違いない。貴族とかそのあたりだろう。かがり火を焚いてまで何を伝えたいのか知らないが、近寄ると民衆に踏みつぶされかねないので遠くに居る私には聞き取れない。ぼんやりと演説の様子を見てみると、私の耳に聞きなれない、しかし懐かしいような気がする声が聞こえてきた。

「みつけた……！」

そしてふわりと持ちあげられる。

何事かと思つて拾い上げられた手の中から見上げれば、金髪の少女が前髪に隠れかけた瞳でこちらを見ていた。頬を涙が流れている。

「久しぶり……師匠……！」

そつと口に出された言葉は、確かな親しみが感じられた。私も幾度も聞いたことがあるような気がした。

「ぐッ……！」

そう自覚した途端、頭に大量の何かが流れ込み、頭痛に襲われる。これは記憶だ。この体の記憶……

ああ、そうだ。この子は

「ああ、良く見つけてくれた。ありがとうオゾシーク」

そう告げると少女のオゾシークはにっこりと笑う。

この少女はカタツムリの私を師匠と呼んで慕う変わった子だった。隣の大陸に行くと言った私に、ついてくると言いだしたのもこの子だ。

いや、隣の大陸に行くと言ったのは私ではない。この体の記憶だ。混濁している……。コーヒーと混ぜたミルクのように、もう分離はできそうにもない……

少女が現れたことにより、私は私であり、そしてこの身の持ち主であった。「バード」という名の冒険者でもある不思議な存在となった。記憶が混ざるといふことはそういうことだ。「バード」の二つ名は

「飛躍の妖怪」というけつたいなものだが、それを当然と受け止めている私が居る。

幸い性格はそう変わりないようなので少女も疑問に思っまい。どこ物かは知らない記憶を得た、と言うだけのことだ。

少女の方がカタツムリより速いのは自明の理である。

よって少女の頭に乗って移動しようと 「バード」の頃

の定位置だ したのだが、うまくバランスが取れない。

<乗馬>スキルがあれば問題ないのだが、とバードの記憶は言うがない物は仕方ない。おとなしく少女の手に収まって移動することになった。

しかしこれではどちらも咄嗟の行動がとれない。困ったものだ。

「済まないオゾシーク。<乗馬>のスキルを失ってしまったているよ  
うだ。この身に付けた物を失うとは不可思議なことだが……」  
「師匠、エーテルの混ざった海のせい。私もとても弱くなった。師匠と一緒」

私の体をぶよぶよつつきながら少女は言う。

そうだ。

私は唐突に思い出した。

この大陸に渡る最中、エーテルという謎の成分を含む風に吹かれて船が転覆したのだった。

記憶の混濁は深刻だ。いや、そもそも価値観が二つ混じっていることで私は混乱しているようだ。

これについては自然に落ち着くのを期待するしかないだろう。

船が転覆し、エーテルの混ざった海に放り込まれた私はあわや即死かと思ったが、このように生きている。持ち物と多くのスキルを失って内陸に轉移させられたということだろう。

およそ信じがたいことだが、他に説明するすべを思いつかない。

過去のことはさておき、これからどうするかである。

何をさて置き、まずはく乗馬のスキルを得たいところである。

「オゾシーク、これからどうす

なにを見ているんだ？」

私が見上げると少女は歩みを止め、彼女は街の中央に位置する鑑定屋の横にある井戸を見つめていた。

「師匠、水飲みたい」

私はとても嫌な予感がしたが、井戸に向かって歩き出した少女を止めるすが私には無い。

井戸に歩み寄っていく彼女を不安とともに見ることしかできない  
死ぬんじゃないぞオゾシーク。

### 日記3 (後書き)

何で嫌な予感かと言うと、ペットに井戸水を飲ますと時々溺れて死ぬのです。死んだ時にフラグを立てておきました。

キャラクター情報 517年8月13日 16時17分 ヴェル  
ニース

飛躍の妖怪 バード

男 17歳 9cm 0kg

種族 : 無のエイス : かたつむり

信仰

職業 : なし : 観光客

所属

レベル : 1 : 1

経過

日数 : 1

経

残りBP : 0

殺

過ターン : 518

最深到

金貨 : 426

害数 : 0

プラチナ : 0

達 : 1階相当

プレイ時間 : 1時間57分41秒



少女のオゾシーク ローランの戦士 女 15歳 165cm  
仲間

筋力	:	2(2)	:	bad
耐久	:	2(2)	:	good(100)(100)
器用	:	3(3)	:	bad(80)(80)
感覚	:	4(4)	:	good
習得	:	2(2)	:	bad
意思	:	1(1)	:	bad
魔力	:	1(1)	:	hopeless
魅力	:	3(3)	:	bad
	PV		:	0
	DV		:	0
		カルマ	:	0
		名声度	:	0
		速度	:	29
		狂気度	:	0
		マナ	:	
		生命力	:	
装備品	合計重量	5.7s	(軽装備)	
背中	:	なし		
遠隔	:	長弓 (良質)	「硝子製」	2.1s
矢弾	:	矢束 (良質)	「鉛製」	3.6s

特徴  
「フィット」あなたの持久力は恐ろしい「スタミナ上昇」

59kg

レベル 1

称号

乞食の家 Rank: 91

給料: 約 270 gold ノルマ: なし

## 日記4

嫌な予感は、少女が井戸に落ちないかどうかの不安からきていた。以前水を飲むのに夢中になって落ちてしまったことがあり、その時オゾシークは即死したのだ。

その時は復活の魔法でなんとかだったが、今はそのような高度な魔法も使えない。彼女は同じ失敗を二度としないと断っていたので杞憂に終わればいいが。

「ああ、生き返る…」

オゾシークは水を飲み、身を震わせる。少女のくせにやたらと妖艶だ。

しかし私の心配はただの杞憂だったみたいだ。良かった良かった。

そう言えば、この世界では、井戸やトイレの水を飲むと度々不思議な現象が起こるようだ。

空瓶で掬い取った水分にも効力が発生している場合がある。

大陸の地下には何か埋まっているのではないかと思わされる現象だが、ともかく何が起こるか分からないということだけは確かだ。

「うつつむ。博打にはなるが、良いことが起こる場合もある。私も飲んでみよう」

美味しそうに水を飲み終わった少女を見て、安心した私も飲んでみ

ることにする。喉が渴いているということもあった。  
かたつむりの身では落ち込んでしまいそうになるので少女が手のひらに汲んだ水を飲む。

【あなたは井戸の水をすくって飲んだ】 【あなたは急に色々なことを学びたくなった】 【習得+1】

【あなたは井戸の水をすくって飲んだ】 【これは清涼な水だ】

【あなたは井戸の水をすくって飲んだ】 【あなたは水の中に金貨を見つけた】

【あなたは井戸の水をすくって飲んだ】 【あなたは痺れた!】 【麻痺した!】

【あなたは井戸の水をすくって飲んだ】 【あなたは墨を浴びた!】  
【盲目になった!】

掬い取れるほど並々と湛えられていた水も、5回ほど汲んでもらえばあっという間に水位が下がった。これでは桶がないと掬うことはできないだろう。ここらで止めておくのが無難である。

途中手元の滑った少女に水をぶっ掛けられて盲目状態になったりしたがそれも無事に治り、終わってみれば「習得」のステータスが上昇した結果だけが残る。

上々の成果だ。

思わず微笑む私に、少女は飲み水からこぼれおちた金貨を渡してきた。全部で119枚もあった。

盗賊に取られた分よりも多い金貨が井戸の飲み水に入っていたことに疑問を覚える。

そもそも井戸の底ではなく水に含まれていたってどういうことだ？  
金貨が浮くほど水の比重が重いということなのか？ それは飲んだら確実に腹を壊すと思うのだが…

「師匠、次どこ行く？」

「あ、ああ。そうだな…ギルドトレーナーに<乗馬>を教えてもらうためのプラチナコインを貯めたい。掲示板を見に行くでしょう」

思考を中断し、これからのことを考える。そう、掲示板を利用すればいいのだ。

街には人々が解決してもらいたい悩みを紙に書いて張り出した掲示板が据え付けられている。これは試練で課された、各地の困った人を助ける、という項目にはどうやら該当しないらしい。

中にはとても深刻そうな物もあるのだが、難易度が高く私たちでは達成できそうにない。そもそも地理すら曖昧なのだ。お使い系や護衛系の依頼は遠慮すべきだ。

もし実力以上の頼みを来てしまうと、どちらにとっても不幸なことになるだろう。他の人に任せるとしよう。

『病気の父が死にそうだ』とかいう依頼を無視して、私たちがこなせそうな物を探すと、一つだけあった。

\*\*\*\*\*

『恋人への贈り物』 (3日) 市民のコッポフガ

恋人へのプレゼントは何がいいかじゃん？ とりあえず報酬に金貨682枚と補給品を支払うので、クズ石を調達してきてにや。

\*\*\*\*\*

実にあざとい口調である。

「恋人にクズ石をプレゼントしたいと来たか……」

「街の外に行つて拾つてきたらいいのに。期限も3日ある」

きつとそれすらできないほど忙しいのではないだろうか。

そう考えてみるが、正解とは思えない。まあ他人を理解できるなど、おこがましい思考である。私は理解を放棄した。

とりあえず、洞窟の中にあつた物は重いものは除いてアイテム入れに突っ込んできている。

アイテム入れとは冒険者が持つ謎空間のことで、入れる物の体積を無視できる便利な収納だ。重さはそのままだが十分である。これでも入りきらない物を持つと思つたら魔法を使う必要がある。

ともあれ、その中にはクズ石も持つてきていた。まさか役に立つとは思わなかつた。

クズ石一つに682gp払うというところに形振り構わなさを感じる。持つて行つてあげると喜ぶはずだ。

街中で警邏中のガードに道を聞き、掲示板に書いてあった住所を尋ねると依頼主の女性は飛び出すように出てきた。オゾシークが持つていてくれなかったら、私は扉の下と地面の間ですりつぶされていたに違いない。恐ろしい世界だ。

「依頼を見てきたのかにゃ!？」

「ああ……これでもいいのか？」

「あー! これにゃー!」

躊躇いつつクズ石を見せてやると彼女は目を輝かせた。よかった正解だったようだ。

どうでもいいがにゃーにゃーと鬱陶しい語尾である。大人の女がやるのを見ると吐き気すら感じてくる。

「にゃりーん! これが報酬にゃー!」

にゃりーんて。

謎なお礼の言葉と共に、報酬が渡される。

確かめる間もなく市民のコーフ…なんだっけ? とにかく彼女は引っ込んでしまった。

「ううむ、ノースティリスの人間は故郷に増して難解だな…」

少女の手の中で唸りつつ、もらった報酬を検分する。

オゾシークも興味があるようで体の上から視線を感じた。

報酬は金貨682枚とプラチナコインが1枚。

感謝の心が形になったとか強い思いが顕現したとか色々な説があるが、プラチナコインは依頼を完遂したりダンジョンの主を倒したりすると手に入るものである。クズ石を渡しただけで発生するのだからこのコインも良く分からないものである。

そして報酬に書かれていた補給品というものは茶色いポーションであった。

飲むのが躊躇われる色だ。泥水にしか見えない。

何が入っているか分かれれば安心して使用できるのだが、何か分からない物を使うことはできない。流石にないとは思うが色つき塩水の可能性もある。

なんにせよ、作り手が違えばポーションの色も違うし、匂いを嗅いでも判別できない。

「折角だ。鑑定してもらおうとしよう」

そう呟くと、少女は口をとがらせる。嫌な思い出があるらしい。聞いたことはないが、私と彼女と出会う前、彼女が一人で冒険者をしていた時に苦労したのかもしれない。

「鑑定魔法は高いから嫌い」

「まあそう言うな。まだこちらの相場がわからないんだ。調べるためにも利用しておいた方がいい」

「お金がないのを分かって高い値段を示してくる」

「まあまあ」



その口では文句を言いながらも、素直に鑑定屋へと行ってくれるのが彼女の可愛いところだ。

少女をなだめつつ、鑑定屋に行き鑑定してもらおう。

鑑定料は一つにつき300g p。前いた大陸とそう違いはなさそうだ。つまりオゾシーク曰く高い値段段である。

鑑定してもらっている間魔術師の婆さんをみていると「神の存在なくしてこの世は無意味よ！」などと危ないことを言い出したので、他に視線を移した。

ヴェルニースの街の鑑定屋には鑑定士のほかに情報屋とギルドの出張所があり、受付が冒険者たちを捌いている。交通の要所にある街らしいので、冒険者も良く訪れるのだろう。

「できたよ。これは睡眠薬だね」

渡されたポーションに触れると、『睡眠状態を引き起こすポーションだ』とメッセージが脳裏に浮かぶ。

鑑定魔法の効果である。「バード」の知識にある物と同じ効果だった。これからも「バード」の魔法知識は有用である可能性が高い。うまく使えるだろうか。

ついでにギルドトレーナーに付与してもらえるスキルを見せてもらった。

集落にたいてい一人はいるギルドトレーナーはその街の特色にあっ

たスキルしか付与できないことが多い。

農村であれば<乗馬>のように。

ヴェルニースでは「採掘」「探知」「鍵開け」「錬金術」「料理」「銃器」のスキルを覚えられるらしい。

「バード」は光子銃を使っていたようなのでその経験を生かすためにも<銃器>は取りなおしたい。

<鍵開け>は、覚えていないとダンジョンをクリアしてもボスが残した宝箱を開けられない、という間抜けな事態になるので覚えておかなければならないスキルだ。

ヴェルニースで必要なのはこの二つくらいだ。

しばらく洞窟を拠点に動き、ヴェルニースでスキルを二つ覚えたとこで<乗馬>を覚えてくれるトレーナーが居るといふ農村、ヨウインへと行ってみるとしよう。

「オゾシーク、これからのことだが　　オゾシーク？　眠たいのか？」

「…眠くない…」

目をシパシパさせながら少女は首を振る。彼女の髪の毛の先がちょうど背中を撫でてくすぐったかった。

「ウソを言え。露骨に船をこいでいたぞ」

「私は眠くない」

「とは言え私も昨日から歩きとおして疲れている。宿を探すのは良いことだな」

「私は全然、眠くないッ！」

「!? おおおい！ 怒るなオゾシーク！ 私を握るのを止めてくれ！ 潰れてしま…！」

\*ぷちゅ\* と私が潰れる前にオゾシークは手の力を緩めてくれた。

こんな日常にも死の危険があるとは、流石かたつむりだ。というかオゾシークはなんで怒った。前々から言葉が少ないために理解が難しい子だったが……生理か？

はあはあと荒ぶる息を整え、何とか言葉を出す。

「私が…そう私が眠たいんだ。一緒に宿を探してくれないか？」

「うん……わかった。それと握ってごめん……」

どうやら彼女は寝ぼけていたらしい。そういえば寝起きが悪い子だからな。それにしても謝り方が男らしい。

「なに、大事ないさ」

「うん……」

少女は何か思うところがあるようだったが、口にはしなかった。

そんな彼女を気にしつつも、ヴェルニースの街明かりの中、私たちは宿屋を探すことにしたのだった。

日記4 (後書き)

キャラクター情報 517年8月13日 19時33分 ヴェル  
二ース

飛躍の妖怪バード 男 17  
歳 9cm 0kg

種族 : 無のエイス : かたつむり 信仰

職業 : なし : 観光客 所属

レベル : 1 : 1 経過

日数 : 1 : 0 経

残りBP : 666 : 927 殺

過ターン : 666 : 1 最深到

金貨 : 0 : 1 プレイ時間 : 3時間14分47秒

害数 : 0 : 1 達成 : 1階相当

プラチナ : 1 : 1 筋力 : 2(2) bad

到達 : 1階相当 筋力 : 2(2) 生命力 : 100(100)

プレイ時間 : 3時間14分47秒 耐久 : 2(2) good

器用 : 3(3) マナ : 80(80) 器用 : 3(3) bad

感覚 : 4(4) 狂気度 : 0 感覚 : 4(4) good

習得	:	3(3)	速度	:	29
		名声度	:	19	bad
意思	:	1(1)			bad
		カルマ	:	1	
魔力	:	1(1)			hopeless
		DV	:	0	
魅力	:	3(3)			bad
		PV	:	0	

装備品 合計重量 5.7s (軽装備)

背中：なし

遠隔：長弓 (良質) 「硝子製」 2.1s

矢弾：矢束 (良質) 「鉛製」 3.6s

特徴

「フィート」あなたの持久力は恐ろしい「スタミナ上昇」

仲間

少女のオゾシーク ローランの戦士 女 15歳 165cm

59kg

レベル 1

称号

乞食の家 Rank.91

給料：約 270 gold ノルマ：なし



## 日記5（前書き）

グロ注意。

e10na的には平常運行ですけど。

## 日記5

宿屋は冒険者に対してベッドを無料開放していた。金のない私たちはこれ幸いとベッドを確保し、眠りこむ。

\*\*\*\*\*

身体が妙に火照ってあなたは目を覚ました。気がつくと、あなたの方にあった傷跡が完全に消えていた。

【あなたは我慢することの快感を知った】 【耐久+1】

身体が妙に火照ってあなたは目を覚ました。気がつくと、あなたの方にあった傷跡が完全に消えていた。

【あなたは治癒の技術の向上を感じた】 【<治癒>スキル+1】

7時間眠った。あなたはリフレッシュした。心地よい目覚めだ。

【潜在能力+12%】

\*\*\*\*\*



妙に体が火照って何度も目が覚めたが、寝起きは絶好調だ。体が柔らかいので寝違ふということがないのも大きいだろう。体を起して身をひねると、頭の中でフーン！ という音がる。これはあれだ…！

【あなたはレベル2になりました！】

レベルアップだ。

知らない間に経験値がたまっていたらしい。経験値などと言う以外にもゲームつばいが、「私」の記憶で客観視したこの世界はいかにもゲームツばいのだから、このように考えるのも無理はないと自分で納得している。

この世界のレベルアップはHPとMPが増え、BPを得るという恩恵しかない。レベルが高いからと言って強いとは限らないのだ。鍛えに鍛えたレベル5が、鍛えていないレベル30に勝ることもある。

とはいえこれでまたボーナスポイントが入った。BPの入手は習得の値によつて依存するので、習得の低い私が得られたポイントはたったの2ポイント。

流石かたつむり…

それをまたく回避>につぎ込むと、く回避>スキルが一つ上昇した。

これでまた一つ強くなった。

そう思つて周りを見渡し、違和感を覚えた。

「む？」

オゾシークが居ない。

体の小さい私をつぶすことを恐れた少女は違うベッドで寝ていたのだが、その姿が見えなかった。トイレに行ったのだろうか。この世界は、たまにしか行かなくていいかわりに時折凄いのが出るからなむ、いかん。女性のそんなシーンを想像するのは紳士の風上にも置けない。

他のことを考えよう………とっていると、部屋のドアが開いて少女が戻ってきた。

こちらが口を開く間もなく、歩み寄ってきた彼女が一枚の布を差し出してくる。

「これは……外套か。しかも結構いいつくりをしている。」

受け取るとひんやりとする外套から情報が伝わってくる。鑑定の方法がかかっているようだ。

氷結の革の軽外套「3 / 2」

軽い外套だ

それは革で作られている

それはD Vを3上昇させ、P Vを2上昇させる

それは感覚を維持する

それは冷気への耐性を授ける 「\*」

「師匠にそれを着てほしい」

「私が？」

少女はうなずく。長すぎる前髪から僅かに覗く目が意志を持って私

を見ていた。

「師匠は、とても柔らかくなっている。持ち運ぶだけでもとても不安。転ぶこともできない」

「それは……」

恐らく少女は昨日私を握りつぶしかけたことで思い知ったのだろうと思う。「バード」であれば、塩には弱かったが決して柔らかくはなかった。しかし今の私では、彼女を大いに不安にさせているのだろう。私はその好意をありがたく受け取ることにした。

私が纏おうとすると、外套は縮んでちょうど良い大きさになった。この世界の装備品は異形の者にも優しい機能付きなのだ。バードの時は疑問に思わなかったが、今見ると不思議である。しかしこれも考えても無駄なのだろうな。

「しかし高かっただろう。どうやって買ったんだ？」

「……お金をばら撒いてる人が居て、拾った」

昨日までの私たちの財産は私が持っていた927gのみである。少女は無一文だったのだ。どう考えてもこの性能の外套は買えない。勝手にお金を使われたのは別にいいが、すべて使っても買えはしないだろう。案の定少女も一度はあきらめたという。

しかしお金が足りなくてあきらめた少女の前でおっさんが走り回りながら金を振りまいていたらしい。

ヴェルニースには狂人が居るのだろうか。

私は少女が誰かを殺して奪ったのではないかと疑ったが、力の落ちた彼女に殺せる人物が大金を持っているとは思えないし、なにより

少女のウソはすぐ分かる。どうやらウソのようなホントの話らしい。おおよそ1000g p近く放り出したその人物は何者だろうか。お近づきになりたいようなりたくないような。とりあえず少女は、高速で走り去ったその人の顔を見ていないとのことなので、この件は保留だ。

とはいえお陰で現在のお金は4g p。食べ物にすら困る金額である。早速アピの実にお世話になるかもしれないと私が思っていると、少女がネフィアに行こう、と言いだした。

「ネフィアに？ 言っておくが私たちの能力は完全に初心者のもそれだぞ？」

少女は分かっているという風にうなずいた。

「初心者でも安心して入れるネフィアがある」

ネフィアとはダンジョンである。地下に潜るタイプと塔を登るタイプがあり、入る前に威圧感の大きさとかで中に居るモンスターのだいたいの強さが分かるのだ。少女も冒険者であったからには当然それを知っている。

外套を買ったついでに軽く情報を仕入れてきた彼女が言うには、子犬の洞窟と言う名のネフィアがヴェルニースの東にあるとか。

昨日の今日で掲示板に私たち向けの依頼があるとも思えず、それならばネフィアに行き自分たちを鍛えつつ、アイテムを拾ってお金を稼ぐことにした。

「そう言えばオゾシーク。装備はそろっているのか？」

「高い物は旅費として売った。あるのは安い大剣と兜。あと石」

そう言いつつ、彼女は自分のアイテム入れから大剣を引つ張り出す。弱くなるうとも剛腕ぶりは健在のようである。

私では持つことすらできない大剣を振り回す彼女に、「バード」も尊敬の念を持っていたようである。

「うむ。私は弓だ。銃器のスキルは失われていた」

「分かった。師匠は私が守る」

頼もしいことだ。そして実際そうなるであろうことは火を見るより明らかだ。以前なら知らず、今の私は相当弱い。矢を放てたとしてもほとんど効果はないだろう。今度のネフィア探索も彼女がいなければ行こうとすら思えない。

恥ずかしい限りである。さっさと強くなって、少女を逆に守りたいものだ。

そしてあえて言おう。

それ以前の問題だったと。

ネフィアにたどり着くことすらできなかったのだから。

私たちはネフィアの中で食べるために道すがらアピの実を拾い集めていた。

そしてモンスターに襲われたのだ。

第一波のかたつむりの群れは何とか退けた。少女の大剣無双だったと言っておこう。というかカタツムリといい勝負をするのは私くらいだ。

そんなかたつむり相手に無双した彼女も、第二波であるコボルトには全く歯が立たなかった。

コボルトは中肉中背の男の顔が犬になったようなモンスターである。武器を扱い、初心者が会うと死を覚悟した方がいい相手だ。

能力的には初心者だったオゾシークもコボルト一撃で弾け飛んだ。何を思うこともできず呆然と彼女だった肉塊を見る私に、肉片となった彼女の一部分がびちゃびちゃと降り注いだ。

そして次の瞬間、私の体はコボルトの足で踏みつぶされていた。

こんな終わり方では納得できない。

ふぎけてもらっては困る。

こんなところで死んでいられるか！

【這い上がる】

【埋まる】

「……………ッ！」

目覚めると見覚えのある洞窟である。

すなわちあの苛つくエレアに会った場所である。

【バードは家まで運ばれました】【レベル6になっていないので能力値の減少はありません】【金貨をいくらか失いました……………】  
【 - 1 g p】

次々と脳内メッセージが鳴る。

私は這い上がることができたのか……………。

この世界の人間は死んだ時に這い上がることができる。這い上げれば自分の家で目覚め、家がない物は最寄りの街の専用の施設で目が覚める。

とは言え這い上がることができない者もいる。生きる意志が弱い者など特に危ない。

そうだ、オゾシークはどうなった？

彼女のことだ、きっと這い上がっているに違いない。

迎えに行つてやらねば………きっと待っていることだろう。

己の体がゆっくりとしか動けないことを恨みつつ、ヴェルニースに向かつて這い出した。



## 日記5 (後書き)

PVがある外套が「氷結の〜」しか売ってなくて買えないや、って思っていましたら狂人が951gpも落として行ったので色々売ってギリで買えました。

ゲームが空気読んでくれた感じですね。

キャラクター情報 517年8月14日 16時53分 わが家

飛躍の妖怪バード 男 17

歳 9cm 0kg

種族 : 無のエイス : かたつむり 信仰

職業 : なし : 観光客 所属

レベル : 2 : 2 経過

日数 : 2 残りBP : 0 経

過ターン : 1144 金貨 : 3 殺

害数 : 14 プラチナ : 2 最深到

達 : 1階相当 プレイ時間 : 4時間22分51秒

筋力 : 2(2) bad

少女のオゾシック ローランの戦士 女 15歳 165cm  
仲間

特徴 「フィット」あなたの持久力は恐ろしい「スタミナ上昇」

装備品 合計重量 6.4s (軽装備)  
 背中：氷結の革の軽外套 「3.2」 0.7s  
 遠隔：長弓 (良質) 「硝子製」 2.1s  
 矢弾：矢束 (良質) 「鉛製」 3.6s

耐久	:	3(3)	生命力	:	100(100)
器用	:	3(3)	マナ	:	80(80)
感覚	:	5(5)	狂気度	:	0
習得	:	3(3)	速度	:	29
意思	:	1(1)	名声度	:	12
魔力	:	1(1)	カルマ	:	1
魅力	:	3(3)	DV	:	3
			PV	:	2
					bad
					hopeless
					bad
					bad
					good
					bad
					good

給料：	約	270	gold	ノルマ：	なし
乞食の家	Rank	91			
称号					
レベル	1				
					61kg

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7790x/>

---

かたつむり観光客のプレイ日記

2011年10月21日02時06分発行